



讀書錄

改定三河後風土記

九

第 四

期前	元	日	月	日
期後	年	月	日	日
文	冊	冊	冊	冊
書	冊	冊	冊	冊

210
ナ
I-9A

改正三河注風土記卷第九

目錄

- 一 三州八面合戰之事
- 一 岩崎外候軍敗走自矢田原十部討死之事
- 一 播磨陣幕之事
- 一 三州平均自厭雜傾求所禱之事
- 一 戶田重貞以謀奪人質事
- 一 右田城下軍之事
- 一 宮後詰之事



A210

1-9A

— 小原德実吉田国城之事

永禄八年己丑

— 田原玄池落城之事

— 牧田木國士隆系自三奉行之事

— 寺部上地城攻自依尾豊前守之事

— 法藏寺由瑞自寺門願之事

同九年丙寅

— 三好松永執將軍茂輝卿之事

— 牧田家婚自神君御叙尊并是利

— 茂昭諸國經歷之事

— 佐藤君御定婚自今川家澄流之事

— 武田佐玄謀嫡子茂信自織田武田

同十年戊辰

— 結婚之事

— 義榮朝臣將軍宣下自堀川守深小増兼

— 武田佐虎隠保之事

— 織田佐長魚且利茂昭命事

— 杉平勘定部佐一加勢之事

— 織田智波早古陣之事

改正河内風土記卷第九

三州八面合戦之事

永祿七年甲子二月八日酒井指染助正親、
親たる三州西尾の城兵糧乏しき由
是崎へ泊せたり 神君川合の水此
下此中佐久と援兵と流せりは佐久二千
余人を門具一に加勢せり侍

神君此勢我以て之糧を守護せり 矢
矢此の方へあり 西陣へ四つ六里程と程
難なる西尾城へ之糧を納りし其所備置
八面の城は素交路へ 八面、各軍あり 指染助

正親も西尾より人粮を發し楢井
小川沖舟八面の色を放火す八面の城は
固の志を少く打てお志寄は八口さ
弱くと云稱して雲四斗川退けは
城を係る系々々追來る我馬(馬)川
高崎の勢と川尾勢左右より是は總兵
多より川退し九控は始退し是れも
大道しは區々改まはは城兵た
々々々皆城へ逃歸志其時一揆方頼
切是は馬場平定と天龍河原討丸
寺り高崎川尾の西勢勝軍しは川の

安政と云々々々川尾もは徳家勝もの
一揆を二音今人是と喰ふ人と押合し
是れを遂に其力しは勝舟の安政の
信持宣誓中の安政も楢井の固志を
三つは別強給倫々々比類南は勝舟
者大勝し而徳寺は決の持安政も安政
は徳木乃八角の棒を振る夜又天龍
の意を信は龍勢しは所獲はは是れ
神君御説しは彼は音は少しは
大力量の悪僧古舟の味方打物其の
徳員は徳寺しは只是は利しは是れ

ト云一陸ノは酒井新田物本多平ノ部
其外石川直義今村安義ハ何處モ馬上
遊者ノ村ニ者馬馳多クは村ノ外馳進
テハ追拂討メ討侍共セリヤ云ハ此
ト申モハ筑城川具一揆古ノ真中一
横合ヨリ赤ク廻ル島崎留モ切見ト
拵ク割ク入三條と始音余ノ一揆大
何ハ以テ左側ノキ教クモ赤キされて
敗走ルモ追討一揆六十余人、
首モ此水腫ノ家人上田直一揆ノ隊長
珍木河之左と討九奴坂井ノ島光寺ハ

此ノ貞逆モ物持師一ト思ハ本寺ハ
如龍寺城逐次寸せんト云原ノ上ニ是言
云ク本龍寺ノ宣誓禰古ノ縁己ヨリテ
河院ノ降古(只今)性生寺ノ有極と云ハ
大音声ノ呼ク上常押切邊と投擲
腹一文ノ字ニ捨切ク南之河河院佛一ト
唱ヘリ刀ハ先と口ヨククニ岸ノ上ヨリ
真逆ノ最勇モク死ケルハ本寺ノ
對一々忠良ノ最期モ形ハナシト云ハ
亦モ其間ハ本龍寺ハ強ク一揆ヲ逐テ
送ク寺内ノ逐入是ハ口己ノ美盛ノ也

足崎さしと申、師備増なり 此二版原書、云遊也

の法書皆此編なり、六之別一様宗記、基評順形、同じ宗記、此よりゆ

足崎兵候軍、敗走、矢田佐十郎

討死之事

二月十二日は足崎より石川又守郎根東
十内布祿海に於て舟中、計略勝鬨の
形勢、兵候の爲甚、八寸舟、如賊軍の方、
内色の者や、五々、一様、古物、と、海を
向道、川流、を、急、又、起、急、者、之、務、亡、中、也
御也、古、物、回、中、六、峰、至、す、元、免、物、を、更
直、也、と、を、と、申、す、は、け、方、も、同、海、に、

舟に入、臥、て、我、一、石、川、八、源、を、見、て、川、返
板、取、は、御、也、古、物、又、高、木、ら、是、廿、二、首、と
知、ら、す、布、祿、も、免、物、を、又、と、川、返、く、討、つ、事、六
味、二、方、敷、く、よ、申、す、川、返、は、御、備、番、等、は、板、取、物、取、
付、遊、覽、此、月、又、依、崎、上、宮、守、の、一、様、系、之、旨、也
矢、田、佐、十、郎、と、大、將、と、し、て、足、崎、一、押、を、
たり、神、君、同、右、矢、田、佐、十、郎、は、も、別、當
り、と、し、て、毎、日、味、方、を、け、絶、也、今、日、も、當
真、也、と、し、て、奮、戦、也、と、し、て、汝、亦、日、余、の
者、も、は、目、な、る、事、以、佐、十、郎、哉、是、遊、討、也
と、し、と、申、す、知、河、邊、は、御、意、人、の、事、と、

其を尋ぐ侍を召し他十郎例の如く
 してはうけく進ませしを速方一回兩敷の
 如く御地を歩かせ河や浦へす他十郎と
 馬上より歩ませその時御旗本一回の
 切欠掛へちへ御免は言余の一揆者
 大又御易しへ他十郎を抱きしへし
 上言寺すしへし遊降侍遊降侍 言馬場矢田清光を承
 大藏に召し家代化は海降言心上言寺に召入り御免ししと此日
 其首を召置り第一揆要口せしとを召置候し候し木村
合衆一揆候し御出馬候し御免し候し
御免は三月又係り御出馬候し御免し候し

一揆亦降参之事

古呂若末寺より着りたる一揆方吉田清光ハ

之を召し白門迄も逃さしりし本多近部
 正徳と知己の交厚ありし故勤らして
 心ならずも一揆方とはなりし是等の
 御家人衆無き事莫し古田と知己
 なるは由り古田へ喜鶴を送りしは
 各重代の君恩を顧み不義の一揆を
 糾し叛逆の名を残さむと安智なるを
 云へしをやく天命を思ひ君臣の道と
 守り雖余亦くも根柢を回し古田等
 等をも諫め早く罪を謝せらばかき見と
 中道侍吉田等より先水と悔も折し梅

竹道はあつたはるに因てせり蜂屋世之元ハ
大之保堂の道徳也。五郎吉忠の忠務
よりもを——は蜂屋は活著つ忠依。
たう跡し未だ戦けの依く忠務忠依は
号依へるう尚付海内たの乱く天下の
豪傑妙に割據——各代を切光く
自らと注ぐ富——終る獲を中——
揚んとす出る善勇重恩の御事人
宗門に選ひてまは然歎とて其時座を
伺ひ道徳の歌ふより押交御願を縁
せばわ——き御大事成——早く一揆の

徒の源神を許すも是は御願せ——免
治へきも如と練も。神若くえり完に
乃ゆも也。忽又其練と採用——治
依く忠務忠依は蜂屋世之元居若只
回中節 如多甚部 如と回道——今
大最御免と謝——油湯——今此輩
御治る唐津の降古宗光西寺(全集
——く恩免と世る上御早く御免も
を——一揆の奇く御治るはいと安と——
園中釋燈の切を速せんとはなは

一此第一揆に世せ——法士御願世の幸

一 石場信俊有る元ノ七ノ三ノ三

（まじき事）

一 一揆し流し人 一命を物とらふ（まじき事）
右ノ三ノ三條所免より下は向後忠直を
そし東條兼上地八面ノ場を美濃一
其外陸奥遠く退治はふしとすよう
忠勝忠直又号候へり其由中とす
神居ゆふ其三ノ三條八面より作候
一 一揆一揆流し人をも物命の難はけ
ふしと信けり忠直父忠直入道常流
より流し子孫一揆在年より東日

復々の苦戦も或ハ毀傷一我ハ戦死す
此忠直を哀と思ふ小おしては今も忠直
忠直流し女一揆古流しは物命今ハ
所解しとて彼をとすこと東條上時
八面ノ場を改竊し西ノ河を畧定し
基業我咄く取し給ふ一是先流し
老後の預之と流し是より先織田信長
流しおどろきと使者と一早く一揆中
罪を免し遠州一揆我おしと
諫らぬ水腫り中と流しけり流し
とすよう

神 君と其流し信しあり

城軍一從より所赦免の爰は始りて二月
 廿八日上和田村津吉宗淳 聖院一宗淳聖院
 通ひせらるる賊徒亦夥く是所を書して
 下さる一は一段傍俗怪より更張り
 斯く石川日向寺家威治を輩り降参り
 蜂屋右と書内とて古呂の寺秀寺
 日向寺も是は寺内の一揆も是れと必し
 大に騒動すも日向寺大寺より賊等
 一回より赦免をせしめり是は一揆も干戈を
 投ぐる際も是れも是れ計略の方入逐可也
 所り寺内忽ち辨證も是は日向寺八所く

針考よ白ひ言頃より勝鬘寺の押言
 寺内より火を放け相は恸一揆も大に根柢
 せり付目日向寺一揆も悉く助命可きと
 是れり一揆も是は一揆も獲生せし是れ
 録声 天地を告ぐる降参す 佐々
 寺内より神守も此れも是れ一揆も是れ
 思ひくも退散を甚中りは降参して
 五人の御家人となりしは又近きを
 行儀知さるる所り御家人の御家人六
 光此を悔此後二心願く忠節を盡さむ
 唐津光西より於り 神文の誓詞を

執一たり横井の松平内膳正信定之孫
監物家出付改又孫也然へ此小字り
一々大立保酒井未終くと凍まり包る
御免許有のみ形は本願中々安堵
せしま一々は前候一々養生の意を
感一けり

按てまゝ二州岩田村中村某之家
彼一白家一按家私記といふ書
文詞古拙なりといふも此一札の
始末頗る審なりと似きう依て此一札
の事一書は大威紀巻業成績と云

是書と刑定一彼家私記とも採用して
甚此漏を浦へ者少くは甚中又依時
賦と合戦の時所味方敷くは敗走せ
くは只所一評より素子の妙源寺へ
へ下也後よりそより所依大勢池某卷
は方哉按く款を並拂い此意より中
一々一々所帰城あり此等

沖君よりは内陣へ海へせ給ひ悪心得
彫刻一書為佛等を一按退教國家
安令れ所所念浦り一々三月廿
妙源寺一所書下寸生此和号と是等

河津河の河津佛堂、安堂、
寺、今、河津寺と云ふ、
河津院、世に、
其河津寺、
妙源寺、

之州平均、

橋井の松平監物、
佐治の松平、
岡河、
播、
殊、

九州の、
加、
大、
浪、
其、
其、
伊、
甲、

降人と成りよる是は仰せ奉る道
中より一合は物けらるたれ
八田の城を占めしは河内由
落磯一程れ病死者
室敷紀元三河前長
室利一撃一
降降世石信亮善斯く降く未の者古城
先子と一 吾良東條の城を攻む善昭
防戦の術を弄し其果逃れずと知
逃れしへ逃りて依く本居統を頼む
彼可く治居せし後年松州芥川
合戦乃討死せしと也
室敷紀元吾良元亮善
宗利一撃一

吾良元亮善昭 吾良、家人大内内記善春
其子吾良部以徳回合を東条徳吉は皆
所家人よりかきし徳吉、二子は長春
七郎を徳松平七郎、次は徳吉とて後
切腹とせしき徳吉、松井左近忠吉を
よめて酒井將監忠尚は之州上野に居
せしは是をも直に攻むしは將監と
必死とせし防戦を仍く幸に小林
全助亦助給合人討死せし、城は終
了すは將監は我々の罪を乞ふ

及い々を改定 後州へか奔宗純宛 仍て上野

の地は此州之長より平均一

云道もれ一却と一向宗のち流慈波部

文形一檀親を柳とと愁訴せしは

是をも少石へも凶悪の僧徒皆放逐

元の如く揚りては門徒俗とも

師に改とてこみ巾一息禪澄せり

宗純宛は通揚並に破却僧とて一向宗は門徒亦是は所望なり

日向の母の教を信する中の一向宗者、世無先件せし、

坊は云よ及し檀親の武士町へ百地の

なり々々々々登巻上人自筆一箇の襦の

是皆真んよとて一揆原とるも勝り

初れく移遷するは是と仰る
今と日光山所宝庫第一の所宝物
と云々

按すくは厭難傾束の所旗由東区々
一一定せし大樹寺開山努卷愚意
此二石哉所旗より書く就忠君を輔す
親忠君此所旗を用らる井田此の
合戦より切縁のひし後御代への
所旗と定らるたりと云暖巻深五是二説
なり筆記法皇君出山

井田神より所家人等滅回位、夷、
勢と合戦の時大樹寺の登巻は白と
旗より書く如勢よりあり味方徳利ヤ
より用いらると云御吉深是其二なり
又楠棟官合戦今川義元討死の後

神君大なる城と相伝ひ其夜大樹より
窺らせりし一王滅回勢押寄せ巻不
得持の登巻秘巻此旗と書く、秘伝
此時雖形く旗と違拂治ひけ後御代
と云々戰場毎に用らると云同運福万
是其之一向京一揆の時登巻は文と

所獲よ書く所加縁よとありしと云
新是其言なり又け獲と名漢所澤
小も持せ治ひ一事ハ瓶並に思治
澤達寺の記福よ入たり抄廿二分の
文は惠心僧部徒生要集撰述の時
觀無量壽經の文より六乃至十樂の
廣釈あり時廿二分なりと大樹寺
勢登は親忠若所治縁厚り一ハは
尚付心海の記述を撰す比一撰記
反心の武切と澤とよむとく治治一
所獲よ書く所せ一を用ひ治ひ

らう所累代の所獲とやうも一ハ
大樹寺の所止名の時と一向記の時も
ち傍中加勢の時又け文を書きか
ぢと一ハ史と治その時と始く思
らる一ハ事と澤り抄一ハは是哉
記す所書とも澤らる史明と

戸田重貞以凍奪入管掌

永禄七年二月一向寺僧の徒一撰己は
靜燈一けきは西三河ハ悉く平均一
たり小笠原新五郎斎元始く帰順一
沙揚一けはハ満豆那の口邑と治り

貴せり。是は四月の事。之月、
今川氏真、小原肥前守、結末、今川一、東宮
法士の人質哉。吉田城は丸入、一、一、
畧定せんと計り、一、一、一、
白井未志を國守、一、一、一、
又侍者れ、一、一、一、
重貞は志と、一、一、一、
其母城人質と、一、一、一、
一、一、一、
吉田城は丸入、一、一、一、
一、一、一、
吉田城は丸入、一、一、一、

心を取り、一、一、一、
一、一、一、
進物と、一、一、一、
長持、一、一、一、
城内、一、一、一、
一、一、一、
著古、一、一、一、
一、一、一、
城内、一、一、一、
一、一、一、
一、一、一、
一、一、一、

内通物ハ主人の母を盗ル。其持の唐の
隠。其上。古き衣を脱ぎ多入。其神は
昇せ。内通物自活長持の蓋を剥ぎ其
示。け。又。番の者。其先別。活。し。り。其
不審をも。之を。門を。け。り。其。跡。し。り。り
重貞は。何れ。能く。肥氣。も。暇。を。告。り。其。意
城。門。を。か。ま。り。是。は。逆。の。者。大。勢。也。重貞と
老。女。を。も。獲。り。死。す。こ。し。二。連。木。小。切。り
たり。其。く。其。他。告。す。其。は。

神君所感。後。は。其。旧。願。を。新。恩。の。地
活。く。賜。る。肥。氣。も。安。く。ぬ。事。を。思。ひ。大。勢。を

僧。一。は。後。頼。二。連。木。の。城。を。攻。圍。し。り。
重貞。防。我。せ。り。と。し。り。不。悉。く。討。死。し。
其。是。は。神。君。甚。愍。り。せ。治。し。其。年。
忠。重。隆。頼。と。し。り。不。願。を。逃。り。其。く。
重貞。討。死。せ。り。は。十。月。十。日。事。し。り。

吉田城下軍。事。

今。年。五。月。の。頃。より。神。君。は。吉。田。城。を
攻。り。し。り。其。新。寨。を。築。き。其。く。其。意。不。寺
の。寨。は。精。敵。八。郎。之。部。政。俊。と。守。り。其
糟。家。の。寨。は。少。米。新。九。郎。之。康。元。と。守。り。
一。死。す。其。後。神。君。は。神。田。斗。室。の

寨に至りては冷し夫より右田の城と
所馬城とせらるるは城も大勢ありて
出双方入難き公義も亦多平八郎
忠務此附十七歳城を破れ宇次郎と鑑を
公は是今日の一毒瘡之瘡居す元毒瘡
たふさる我初く瘡を瘡く故之に城
討れ之に城を以井と姓、鉄地より
打倒さるる、字朱別、勇也、八郎と
川邊、痛き、其趣死に城を
死ぬ是と少武士に討死す、其常之
恥、まゝ働さるるは、帳、事、

とく、歎く、勇將の、あて、没た、母、わと
まうと、皆、人、是、と、感、た、又、定、煙、と、云
者は、鉄地、の、妙、多、なり、其、昔、歎、を
打、北、と、朋、峯、九、河、の、鉄、は、も、負、なり、と、云
公、は、も、負、なり、は、れ、一、生、取、の、ち、ん、と
解、つ、と、十、々、と、今、川、氏、志、す、く、出、姓、と、名、を
下、さ、ま、し、と、し、此、義、も、山、屋、新、九、郎、八
城、も、胆、常、ち、つ、小、原、新、助、を、討、死、松、平
兵、衛、以、加、後、勤、美、成、瀬、小、吉、大、家、他、内、本
首、級、を、得、き、り、戸、田、志、三、牛、氏、光、も、八、筆、を
捨、く、忠、義、也、と、れ、と、城、兵、七、能、防、き、

急な城崩しと云ふり一は其感
乃と云ふ即瑞陣あり 大志傳
海軍業

一宮後法之事

其頃山原原野に定家は今川氏志の義
交々二宮依招八幡の西岩を以て之陣
に馬物を守らせ吉田牛麿の援と
叶付 神君も又一宮の岩を築し
あ多田他位後よ五百の云を添へ
免らば氏志之州の諸士大志是時
降し来し逆白吉田城を攻め申國を急
大軍を遣へ三州へ急白一宮飯部

八幡の岩よ若陣一依原の岩近陣と
港の初々一万余騎を以て吉田城の援兵
と一万余騎を以て一宮の岩を圍め
其身の旗本は八幡依招一箇一別
武田信虎一箇を以て是時一の援を
押へて一十二夜暫く當くと備せり軍
圍攻一少くは
神君三千の人数
より多くし之後法を以て軍令を
よりし亦充切の御家人亦取り氏志た
弱將たりとも其旗下より充切の將士
少くは瑞陣二万と中人数味方は十倍

せり其の後法を妨んとく軍を多と
備たるは尤たるも之の業をくも也勸夫
ありて然一と誅たり

神君少石汝亦中可理也一とせし去時
武士は大身も小身も平素佐と業との
二と因とは道勿、ぬ食穀しも者一
家人と款地と老一動、我すせく並服
其家人の款政をそく、故すは佐と
義と捨ると云者、一方、今、夏の後法を
は預一討死するとも、吏は天運の正
可明とは、そ、う、賢悟の上なり、款の大軍も

小勢も捕れ一と勇運一所出馬の道ハ
所家人、小、突、形、母、後、所、大、將、な、と、各、感、を
流一、回、く、勇、立、一と、石、河、を、是、以、て
酒井、其、の、付、石、川、の、者、も、は、牛、高、り、う
佐、領、八、幡、の、留、は、備、く、氏、真、の、旗、本、中、城
抑一、先、所、旗、本、二、千、人、は、武、田、伝、次、の、
八、千、の、備、を、索、張、り、つ、布、敷、一、本、能、く、系、を
お、一、通、り、今、川、の、大、軍、此、極、威、を、亂、を
吞、を、敵、く、戦、人、亂、を、と、れ、一
神、君、其、付、所、旗、本、勢、の、先、石、川、日、向、り、
所、下、知、り、く、先、子、は、款、の、中、人、陣、と、同、也

と 歎若島は船橋を宥崩せ時六
ら此もやと圖を傳へ貝大敵を討てし
所馬をを治へは今川勢ハハ成あさ
相は敵ハ我をもささると足へまり
直事一宮押法もとり如く治へ
今川勢との言儀又之町斗りの故と
味方の権多を足りあてりりりり
先自と氏志、旗本との言を宥敵
跳形一宮のけ若入居い者も二宮
海保今川勢逆を用く色一宮今典
一宮又一宮一宮の遠州川言後城之

海尾豊前有致實は氏志陣中又
あり、内々若島一志を色一宮是は
今復病と稱し居候一返ると新井
白須賀也とさると大と放て彈倉を
燒つけは氏真驚事浪形一
神若望朝市多百助を始將辛巻く
石具せらる今川の大軍と也也
跳形若島一川九治は是と一宮の
後法とて天下後世並其英武を稱
奉る事一形けり

岩間彦治
基業

小原晴實吾田用城之事

今川氏志は二万余の大軍と信じて田城を
搦んと逼り、佐藤八幡近を陣せし甲斐守
れく是時勢二千余勢よりけりて、是
處に己なりきも、亦おき其の上流方と
相む、飯尾豊前守は居城川原、川原
是時勢の抑とせし、武田信虎も川
原心我、自らさむとの、風勢難況、区
け、是は氏真、魂我消し、く、是を
引く、海府、途端、小原肥前守、八幡
城を、咄、守るとし、氏志は、今
大、よ、懲り、し、再、再、後、結、せん、事、ハ

思絶、當り、喜、三州の、士、士、大、是、時、
降、今、是、城、中、頻、心、細、亂、後、也、
勇、勢、亦、勇、も、境、も、も、肥、前、守、も、防、衛、心、完
れ、大、よ、心、我、懼、し、し、同、年、六、月、是、時
より、は、再、再、所、お、馬、あ、り、酒、井、長、久、村
忠、次、を、先、も、と、し、し、吉、田、城、を、烈、愛、攻、り、
肥、前、守、も、武、田、元、練、の、將、取、り、ハ、力、成
そ、し、防、衛、心、を、し、し、し、後、結、の、程、に、是、
し、し、又、城、兵、目、し、し、力、弱、り、たり、此、時、青
十、四、伊、奈、の、南、多、八、郎、光、忠、伴、与、光、典、
是、時、は、吉、八、郎、光、次、光忠、光典、の、弟、と、共、よ

吉田城を宗元(き)計策致新(き)

神若(か)む(き)り(き)は(き)海(き)未(き)計(き)ら(き)い(き)

任(き)は(き)一(き)と(き)の(き)御(き)評(き)を(き)書(き)り(き)足(き)骨(き)有(き)た(き)

先(き)陣(き)は(き)馳(き)如(き)る(き)約(き)は(き)此(き)足(き)骨(き)の(き)謀(き)の(き)也(き)

城(き)兵(き)思(き)は(き)し(き)防(き)戦(き)を(き)し(き)し(き)し(き)

さ(き)ら(き)依(き)を(き)見(き)え(き)け(き)は(き)彦(き)公(き)部(き)の(き)後(き)者(き)

戸(き)田(き)小(き)栗(き)と(き)云(き)兩(き)人(き)を(き)城(き)中(き)に(き)使(き)し(き)

小(き)原(き)の(き)方(き)へ(き)入(き)ら(き)は(き)此(き)城(き)を(き)改(き)事(き)な(き)し(き)

及(き)ぶ(き)と(き)し(き)も(き)堅(き)意(き)は(き)防(き)戦(き)せ(き)ら(き)る(き)城(き)重(き)

宗(き)取(き)事(き)を(き)切(き)り(き)共(き)武(き)切(き)感(き)を(き)ら(き)し(き)悔(き)

り(き)さ(き)し(き)と(き)後(き)詰(き)の(き)報(き)を(き)告(き)げ(き)し(き)月(き)を(き)

重(き)臣(き)義(き)城(き)せ(き)し(き)中(き)の(き)士(き)卒(き)を(き)換(き)を(き)

事(き)殆(き)其(き)治(き)せ(き)し(き)似(き)き(き)り(き)果(き)し(き)此(き)城(き)

固(き)守(き)一(き)東(き)三(き)の(き)一(き)也(き) 徳川(き)家(き)改(き)事(き)

可(き)人(き)は(き) 徳川(き)殿(き)之(き)來(き)任(き)命(き)を(き)

大(き)將(き)也(き)今(き)川(き)殿(き)と(き)四(き)好(き)を(き)修(き)め(き)し(き)し(き)

水(き)兵(き)の(き)交(き)を(き)明(き)し(き)意(き)難(き)お(き)救(き)は(き)ん(き)り(き)

こ(き)し(き)所(き)は(き)備(き)同(き)し(き)と(き)設(き)勅(き)し(き)説(き)諭(き)

せ(き)し(き)む(き)北(き)條(き)を(き)始(き)城(き)兵(き)は(き)足(き)糧(き)を(き)書(き)

を(き)書(き)け(き)る(き)後(き)詰(き)の(き)報(き)は(き)れ(き)し(き)胡(き)久(き)兵(き)を(き)

求(き)む(き)折(き)衝(き)也(き)は(き)肥(き)前(き)も(き)も(き)子(き)連(き)は(き)同(き)意(き)

徳川(き)殿(き)四(き)好(き)我(き)忘(き)治(き)す(き)今(き)川(き)殿(き)諸(き)將(き)

結語の所不^レは是^レの傳^レ大^レ尊^レ一但^レ
 和^レ睦^レの所不^レは人^レ質^レを冷^レの^レ爲^レを
 子^レや^レ然^レら^レは此^レ城^レを^レ開^レく^レ東^レ之^レ一^レ也^レ
 徳川^レ政^レ所^レ傾^レり^レ後^レ一^レと^レ言^レふ
 神^レ君^レ一^レ其^レ由^レ中^レと^レ是^レは^レ理^レと^レ少^レ石^レ受^レら^レれ
 其^レ人^レ質^レは^レ矣^レ父^レ回^レ母^レの^レ所^レ青^レ松^レ平^レ源^レ部
 藤^レ原^レ松^レ平^レ源^レ部^レ茶^レ酒^レ井^レ也^レ射^レ忠^レ次^レの^レ子^レ孫^レ殿
 と^レ我^レ老^レハ^レは^レ小^レ茶^レ肥^レ等^レ也^レ此^レ人^レ質^レを^レ流^レ兒
 城^レを^レ開^レく^レ一^レ後^レ州^レを^レ開^レく^レ此^レ時^レより^レ三^レ河
 八^レ郡^レ碧海 智波 額田 勝豆 室版 八名 設楽 海安の^レ地^レ悉^レす^レ一^レ河
 たり^レ此^レより^レ亦^レ多^レう^レ切^レ莫^レ大^レ之^レ也^レ昔^レ公^レ節^レ光^レ次

不^レ傾^レ加^レ治^レり^レ光^レ忠^レ光^レ典^レ而^レ人^レ茶^レ家^レ人^レ戸^レ田
 丹^レ波^レ小^レ栗^レ沼^レ有^レ矣^レ一^レは^レ五^レ十^レ貫^レ文^レり^レの
 地^レを^レ定^レ行^レり^レ爲^レ薩^レ蘇^レ又^レ酒^レ井^レ一^レ里^レ射^レ忠^レ次^レは^レ
 右^レ田^レの^レ地^レを^レ賜^レり^レ東^レ之^レ河^レの^レ流^レ士^レ皆^レ喜^レま^レ
 居^レせ^レり^レ六月^レ廿^レ二^レ乃^レ事^レ之^レ長^レ射^レ忠^レ次^レより
 此^レ色^レの^レ人^レの^レ旗^レ以^レて^レり^レ其^レ射^レ忠^レ次^レの
 所^レ書^レ

右^レ田^レ東^レ之^レ河^レ之^レ成^レ中^レ射^レ忠^レ次^レ見^レて^レは^レ
 右^レ田^レ小^レ一^レ里^レ也^レ其^レ也^レ射^レ忠^レ次^レ入^レ城^レを^レ
 新^レ知^レて^レ中^レ射^レ忠^レ次^レ東^レ之^レ河^レ中^レ之^レ成^レ
 て^レ有^レ不^レ傾^レ之^レ地^レ皆^レ爲^レ々^レ向^レて^レ有^レて^レ有^レ

吳彼の地仍也

永徳七年甲子

翁人

六月廿二

家康判

酒井正之助改此酒井正之助改

田原の油取城之事

田原又田原の攝政面、此より、田原豊後守
廣孝より、田原此城は、今川氏より、田原
被官堀江宗肥、後者元智、守知、田原廣孝
権、郷より、田原堀江、田原數日、田原を攻圍、田原
廣孝、家人、田原甚十郎、堀江、長谷川
十郎、部と、田原徳を合進、田原外部を攻破

戸田部を、田原遠次、田原元登、田原一、田原款大助、
圍、田原これ、田原己、田原危難、田原及、田原い、田原如、田原戸田、田原甚
勝利、田原戸田、田原七、田原月、田原先、田原定、田原く、田原と、田原ん、田原と、田原り、田原馳、田原疾、
款、田原數、田原十、田原人、田原を、田原射、田原拂、田原い、田原款、田原色、田原あ、田原く、田原不、田原を、田原越、田原勢、
一、田原回、田原又、田原堀、田原中、田原又、田原攻、田原入、田原く、田原是、田原は、田原堀、田原江、田原宗、田原肥、田原又、
能、田原く、田原以、田原和、田原睦、田原と、田原ん、田原早、田原く、田原又、田原堀、田原江、田原と、田原あ、
彌、田原府、田原一、田原途、田原端、田原と、田原同、
神、田原若、田原廣、田原孝、
切、田原を、田原黄、田原一、田原後、田原い、田原け、田原堀、田原を、田原揚、田原く、田原堀、田原一、田原先、
ら、田原其、田原甚、田原と、田原通、田原り、田原意、田原廣、田原孝、田原不、田原勢、田原と、田原一、田原く、
彼、田原を、田原退、田原と、田原似、田原せ、田原治、
實業其、田原時、田原揚、田原り、田原其、
御、田原書、田原よ、田原云

今度田原権之松子付为其忠美
進進地之事

- 一 二百貫文 田原之 一百貫文 概之口
 - 一 五十貫文 二清之口 一五十貫文 白屋之
 - 一 一百貫文 浦之口 一七十貫文 松地之
 - 一 一百貫文 新地之口 二松
 - 一 田原之松准之 以調畧雖水之
 - 一 宮代之事 其方口寸付并座之山
- 進進地之事
- 一 進進地之口 一系諸段浮不勢其方
之為計書

右修之 水不之有相遠若此内於不量
心代之地之進進之 檢済之為何等
彼地者末代之由如地田原熱地
檢済之於進進地者之免除者也仍
也併

永福七年甲子
六月 日
家席所判

如多豊後段

席者進之自()を改取一 有赤津矣之間
二 松赤羽根神部亦其處之 賜之
七千余貫の地也 續此年又六浦の地

神君を攻らる酒井の射中子も進
 絶無多に攻立きり此城を北平也
 城兵も北平を登り西の如く小射を
 命し進無き後内城部あり正成
 二矢射せり其矢も内城部あり
 鎗付たり一、款付矢を
 又射し一、云け是ハ 神君御
 是城兵謀る一、汝射る
 仕けり一、正成の用ひし又射んと
 をおは城兵を指し略の側にお

待つた一、正成の射も矢其指成
 射後一、其落居たり城を忽射致
 多しは城を大に破りて去る

神君大に其射を感賞し終へり

 平治の初は此城の目録あり其初は永承元年九月末の
 軍の史記は此城の目録の全月留のありては
 此書業のては是は

牧神小国士降余の奉新事

永承八年乙丑の春より今川方の
 氏志将師の如く此書を指揮
 是より夏能く一、一、けは半官の牧
 右馬允成定一、一、徳川家一、降余す

西ノ源九郎清貞著新公布定盈は
世田ノ領一白井事は下條ノ領一是處は
皆御旗本形まは長藤兼子田願の事
皆一け之またより源氏も長藤兼子田願と
山家之書云と皆一之州一國意平均せ
之は是處ノは甚多他處ノ重次ノ力た也
清長天竺部三出席系ノ之土ノ由中
改替所詔裁斷ノ事と命せらる是我
之所ノ之奉約といふ力ハ元稟温順小
一而意屯源ノ天竺は寛厚ノ思
原一甚多は云夜事と有の候よし

思慮の多し一とも是ノさう一裁斷又
隙心之く由又軍國の敏なりは是ハ人皆
能し 神君の人を知りせ給ハ撰りせ
治事幸つたと感一甚多其源之由の
七倍、佛ノ力免能はとち一んや一の天
之節三思一とい一各其世世の
矣や一を一而も集く事哉孝一免治事
事は和子善く極と以て寛を赦し和を
治免唐太宗の唐玄奘と諱り杜如晦と
諱一貞觀の太平を致せ一々如く
別冊をもく一其ノ故ハ寛極と哉

善く施し給ふ 神意の如く是を
けし

寺部上神城攻め版尾豊守の事

三州の風土多岐攻順は中より治本
日向守重教兼其子監物は於今月氏より
與力し 徳川家の命を拒み三州
寺部の城は善く守るは是を拒成す
とて神く心算す其之故と云ふとて攻め
治本父子力城を破りて 治本防無
城を逃す家並と云地は崩れ 後継
十年正月より動く父子と後継を逃りて

氏より居せり 此治本城守の事 治本は治本の子 治本は治本の子 治本は治本の子

酒井清監忠尚一向礼平均の故上神の

城を逃すに後継を卦し又高より西小

治本より元の後継を卦し其を信し上神の

城を破りたり 此由 神若し酒井

其村内後三守の佐成城門道に攻入り

城を坂部造酒元を討死せり 時に佐成

儀より十七日成りしとて 阿倍部守部造

大久保守部守部造徳川守部守部守部

守部守部守部守部守部守部守部守部

守部守部守部守部守部守部守部守部

多く討取らるるを今と預む者若干之
此志士は、廣忠江の討時、橋井の内務正
法、強固に無力し、叛逆し、近年も
一向者流の徒より密謀し、一方の大將より
頼朝を討つ、其時、軍敗れ、後醍醐天皇
へ奔り、又叛逆を企て、時、北長城より、
諸公も、其名と後世に流さん事、尤
愚昧の至、遂に降し、一、寛仁大將の
大將は、佐々木忠和と云ふ、一、評議
一、変り、各城を討つ、降し、其後、仍く酒井
將監力を以て防戦す、其城も、れ、其方

城を逐ふ、後醍醐天皇、又、今川氏忠は
去年、三州、白旗、佐佐木、在陣せし時、
飯尾豊前が致害、徳川敏、内也、
一、痛と、孫、居城、遠州、川口、川邊、以て、
其道す、新井、白旗、佐佐木、の謀、合、
放火し、歸り、事を大に憤り、氏真
後州、一、掃府の後、早速、川口を攻致害を
生捕り、其、産、実を鞠、回せん、と、新、時
左馬助、親規、其、身、式部、少輔、之、規、を、大、將
一、二千、人、城、を、保、川口、の、城、を、白
旗、兵、を、攻、させ、一、豊、前、を、討、古、兵

好色は少も与を以矢炮を花一防戦す
亥子の大槌新地在馬物決地よ才之
討死を 大槌新地を以て討死を 依く教く又改色
駿州へ廻帰色ハ氏志益怒り重く朝臣
備中守恭能瀬名陸奥の親隆甚子恭能
氏能朝臣系兵勇又秀盛中又大槌以兵
攻圍翌一夜を分たを攻一々も致実
防戦の洲を以一亥子の在員死入計
一々城前へ一とは見一其討致実
矢文と射也一某謀者の為又三亥子の
罪を蒙り速恨せん方れ一一時の急教と

遊まんと防戦を以一々も合々矣心と
抱く又此れ不く泄之の虚実を仇憎
あり一恩免を蒙るは不心好く忠勤
を以一々怒起沈文よ活く送るは是れ
討子の事是と強府又増り氏志よ是を
一々氏無家よあの一討子の事以送
致実の罪と免一此後は終々同志を以
施一好色は致実吞くや思ひけん礼謝の
為又強府よ東り々々と氏無謀を回ら
一壯士と依を以爲る又殺害せり致実の妻
女好く一々もあける性樂一々夫の

横死と嘆り城兵と指揮——
籠城——小園の武蔵刑部卿と頼朝甲州
乃武田（内包） 神若此申は右左衛門
家臣江守安藤回加賀人（即内包）
松平寛吉の後裔右衛門尉と御使とせし
徳川家（其婿と後世とあつては左衛門
幼子養婦と申是は所當有るは其
才人亦是右衛門尉の才也）と信是
は左衛門尉と安藤加賀人其婿城以て
左衛門尉と妻を解くと流俗者も大破妻
文も形もせしなりとあつて川内城と

示可きとて酒井左衛門尉石川信吉も
とて白くは物と破妻は防戦の指揮と
城を志す——家か——烈女戦——は身
大に敗走せり其翌日酒井石川又攻めて
烈女戦と遂に介部も示可は左衛門尉
御威の懐に回——毛の腕と若長刀戦
振る款中も切入り侍女婢七八人
回——姫——おとす——城兵六十人と回く
勇戦——男女一人と残りは討死に破妻女
左衛門の是れハ端するは左衛門も其
志操の名烈女史ももつたりたりと感

せぬ者れ一物酒井石川の両村地我
宗百多は在る村と此城をち一統と
白岡安重回加賀の人は宮内と内
衆一者寺とはとく海庵の平順
意く此商人よりさきと向
海庵と徳寺と此の法隆寺
川内城攻の事は素業のり

法苑寺由法有寺門類之事

三州山中法苑寺は二村山田豊院と云
其昔大宝年中中帳狹重 経巻善法院因巻より
出せ寺として名付きとて永享三年より
教空新藝上人波り浄土宗と成り其後

親氏若三州は御給居の須山山記名と
御伝仰あり御預書我納失ら其頃
より寺号と改しとて信光君より其意
建立し法に御預法料永享其父と
寄附しとて御傳伝記のなり也

神右御切雅の親此寺は師一々宮留
花一々と今其師の御現御机を
代親も同選福の法縁別江和深院より此寺の御現御机を
其師の御現御机を法秀より移しとて此
神右縁有る御傳記の後永祿三年
七月此寺の條目哉なりとあり
今年永祿八年三州御平均の後寺原丸

お計り願と〜〜其門より〜〜
其門餘たの也

定 法龍寺門内門外

一 守獲不入の事

一 伐採竹木の事

一 不才陣取の事

一 穀生禁断の事

一 不下馬の事

右於遠紀に族を降してを為科者也

永保三年庚申七月九日 所名

今と宝飯郡山中法龍寺に存する之

三州は令 所當家所發祥地也是は

神祇佛國即申法龍寺多るといふも大禰寺

大禰寺法龍寺は同流の三檀林を以て

申法龍寺の靈場と云ふ也

二好松永弒將軍義輝卿事

等持院膳相國守氏將軍より以方利家

天下兵馬の糧を掌握するも海の内勢を

為りせし事已十三代より方利將軍

義輝卿 頗る聰惠ありし事也

慈照院准后義政將軍此方政徳大

政徳武敏衰廢せし事也

何卒——祖業を恢復せんと神心を
若——めらる——とも等持院殿に來貴内
宗又言——親戚お借し習より之を願
として天下補辱の地よりたす別波思も
兄弟お争て其面遂小哀微細川も西流よ
ふも干戈止時な事まは天下の治を施す
眼を——四海の礼を治す事と憐れみ哉
七道慈く瓦解——天理人倫已よ断
として孝り其頃細川、彼官之好なき事
義德其陪長松永澤正忠久秀、其子
右美佐久通京將軍家哀微よ宗、高よ

叛逆を企けらる、茲年永禄八年七月十九日
俄よ大勢成百具——京室町花山本
と一團むつ長所——事と宿直の事
板十人よこし義輝將軍、月太刀抜て切
お給ひ宿直の事も——を方軍と防衛
宗も大勢密伏切仰働——其夏も
起り、宗と人救も少けは悉く回——枕よ
討死——義輝卿も御自害も——とて
り、宗の之好松永世乱逆を思ひ、
此者告、射根の心を怒り、其弟直家と
宗極せんとの乱逆とはい、又其

明きくも罪す三好松平水迫重持等と
少少一將軍家の政令は固か又さる
事と義輝卿多事心行く思召々々
敏後より上杉謙信上洛一將軍家小
沙汰一三好水迫重持驕縦より上を怒り
者を恨一自由取付中も彼等我
誅戮一治らん思召立可くは病又作
ささく一東下連上洛一彼元忠を誅
中心致安一喜んんと甲斐と發中上は色
將軍家より滋養思召一謙信は御諱
の字場持のみ好くは細代の悪を始

救への礼救を免さる謙信歸國の途も
由し病より治せらるる變り一三好水
少少一已等、諸論の罪深きこと六知と
三好水迫の兵難を遣人の新儀は叛逆
及ひ一もの之母か一も義輝卿の御父
万松院義晴將軍の御才また馬以義維
中六ハ一各女人の所子け煩々くも
阿波より一三好を頼く年月を送る
一我をいつ京却へ信をさるるや可き
世より一苦くも相害三好を頼之宣ひ
は是は三好一統も悔みれく思ひ何事

義輝卿を廢し此若君と爲すなり也
思ふ所を成さず此叛逆を急思ふ
る所を成さず是亦の事以八某年頃
考至たる事先列すとも其事永く
是は河内高家の事とも記さず八家
記すなり

牧神家督付

神君河内叙爵并是利

義昭法圖経歴事

永保九年丙寅より傳りぬ此乙月之朔
牛窪城に牧神右馬允成定宿死せり
其子新次郎成成家徳（子）一族也

牧神右馬允成と云右より成定と云
抑願せんとし成成家徳より其子と
傳し國裁を乞ふなり 神君成成家
理とて成定之遺願悉成し揚りて
所書せ下さず也又彼右馬をば水沖中
伝えり成定國中をせ放せりめら
糞其土月廿九日なり 神君河内叙爵下
叙任し治す（河内叙任の事三州勘定守成定より牧神守
叙任して其事は神君河内叙任の事より
叙任し治す也） 相も京都より月二好松
叛逆し河内軍義輝卿を弑し其
けきは洛中洛外に強勳大方なり

將軍家御舎所兼苑寺の園藪とては
平田和泉と云者屋白く討九南都一密院
免答ハ三好松永未疎畧存せりと申と
いゝとも心附く思ひし。細川三幼存痛
苦存下しといひ將軍家の直臣小を女
系も世傳ひく春日山と云之江州中紀
矢崎へ旅りつ依く木義賢入道取復を
頼。運城之好松永未と疎畧。將軍家
再畧を頼。畧を依下ささるけりとも
取復依の旨順答はるといゝとも急な
御請及り後新くは後より月日を馳せん

ことと論れ。若州乃武田大器兼義統ハ
口婦解明是は是を頼。治くと若州ハ
ト白く。知若州は分内様く。計畧
整備く。城茶の胡倉乃信義系ハ。畧
云も多。甚と武田ハ。甥形。義統系胡
西田中密又
城茶ハ。胡倉乃信義系ハ。畧。胡倉
孫ハ。郎宗。懐と申。逆よ。年。在九月朔日
若州と。云。分。治。ハ。城茶。敦。賀。郡。金。崎。と
逆入。朝倉。宗。敦。限。也。聖。永。祿。十。年
丁卯。四月。廿。一。日。系。谷。の。館。より。一。系。院。殿

元服一の義昭と改らる義宗家領
代々して加冠の役を承け奔走す
しとも上洛の事免す思ふに
是れは中もは程に難儀も起る事ハ
義昭之位は安記心も辨りたり重頼之ハ
之好相承亦阿波の由も慮を絶て左馬
義雄の是城守連(元服す世義宗朝也
稀一是利之家十段の公方と名敷
たりとも) 源朝紀通辨記
織田真紀

原書義昭親爺より又秋後親無之程
弟勝又おこしたりと云後者は永福

七年二月織田殿の由も改じしは濃州ハ
織田忠の領地なり義昭親爺を頼
りてきよ水江今刑を侍

信宗君所定婚身今川家濯流行

一書

永福十年丁卯六月廿七日のは

神君所長男二部部 信宗君所歳九
成らせ給ふ織田殿息女徳姫と通ふ
少方と定給ふ織田殿より佐之宮を討
佐之宮所送より生約八重中出無之部
所喜活たり織田殿男女の是取多あり

たり長子奇妙御曹司依忠後二位
中將秋田城介たり二男兼光御曹司
依忠後二位磐田守山田中納公具教卿の
養子となり二位内大臣道平をたり
三男七郎依忠磐州神戶城守國守後
職となり四男お次丸後二位兼兼右衛門
正二位の中納公を叙任一兼勝卿と
稱せしむる之男はお防丸勝長武田依忠
入道の養子たり六男八大洞依忠後二
三位右衛門と改め依忠後二位を叙任一
又入道一々浦坊と号す七男八洞信高

依忠後二位を叙任す八男はお九依忠
後二位下武藏守を叙任す入道の後二位
と号す九男八景守依忠後二位下武藏守
又正五位たり十男八依好始八長好依忠後二
位下武藏守たり十一男八依九長次後二位下
と号十二は女子是依忠後二位下武藏守
十三は蒲生宰相氏郷の少方十四は前田
中納公利長郷の少方十五は丹羽宰相
長重の少方十六は二條國白前右衛門守の
少方十七は備前守十七は備前守の
妻となり養と取りて後法養と稱し

日榮尼と号す十八は中地東市正某妻
後又佐治無名部一成と名づる利智後
の声隆と号し十九は万里山所産大御
教亮卿の北方之斯く織田

徳川今八道等四也くりとて世治へは
益所親厚く後らせらるる今川は月
勝と成威治へは氏志大は岐と成無
國境より人救をわし一侵挿へと計
くとも何をとりくくき利利も然
別とは氏志直軍の内には大軍を
催し父義元平軍の爲之庵の間に

大合戦と云ふと西へ古安野心も所

たりし氏志の方には更なる兵馬の調練
軍急の浮波もゆへに今日には花見の
酒宴明日は月見の連歌其外常湯祝舞
花見のみより武備の法は夏よりと
少くは波官も許せもいふ波所事やと
肩をいそめ頼を集く怒罵す河内
さへ此七月頃より騒府には風流躍乃
流所をうまふ人耳目を驚せり先
八幡村より躍始り郷々村々躍をく
きは又喜村より躍を返り終り西本の

澗影者如く八月の末九月の半に
澗市には力有るゝと云々聚ると此を以
綾羅錦繡を懸ひ金銀珠玉の飾天地も
うやく計り糸竹金鼓乃ほ響き雷井と
夷の以元貴用をそそよ一日一夜のた無
歳千万を也村より市中へ澗とて市
市中より武士へつけ武士は府城へ
遊とも當年八五を治乃時長も幼は
本年の秋より其の身りて一は九月
下旬には澗を体とて折強有る澗
流の事は是は當時今川氏志より

宛居之浦古より佐義忠、取なつちよと
ぬ一は氏志よ幼め是より一氏各
其家業を珍む澗をのめよとて幸
全く今川家滅亡の兆なりんと云々者
信を翻し愛きうとて此之浦古よりハ
小原肥前も此業の子せう一はは客旅
所聲也一はは童なり一はは氏志
其男色と源也一親過他よと云々
一はは長きうよ経ひ出さ登庸して
一二の者と云はは一はは幸よ今川家の
老長よ之浦二部在つと云者是以終一ハ

其係を嗣——めらま——名入ノ浦とは
名余ノ實父肥前守隆英ハ九州の者なり
——田原の臣小倉之河守子無物ノ推考
より義之時代今川宣元抱らま道々
之名武田と重子之州吉田の城と略
其子幸乃佐男色ノ寵より隆實とし
一入野成増きなり幸乃佐元東宮後
邨翁源ノ氏真其親を佐月とす
幸と己ノ道後福媚とす者とは愚也
若し執成——己ノ後ハ幸乃佐者ハ由之也
由と云然ハ氏真爲弱ノ國將也幸乃

ト支とは麻と云——馬と云と誠と
白我運とトとも文ノ疑支と略其親
乃み信ハ軍師ノ政勢隆礼——士氏
用瓦大方なり士克ノ切正也然歎ハ
云事ヤ——ささとも幸乃佐者ハ後尾
豊前守川守の城攻云々加り父紀常
病歿し——ハ父ニ代り志忠と云々
之名——幸乃佐ハ氏直文武の全也略と
祿貞——小倉元ノ隊長とす父肥前守
折奉せ——小倉無物ノ子内亂物資之と
武州川城の合戦ハ比類なき事也

小糸氏之流と任受——今川前は是も十八
流の惣とせしむる川前も於て
勇と名を以て侍て之を八幡名流の
親能因口刑部少輔親永親永は永任名流人
親永の時親永と加段也む
新地左馬物親規親規は親永の弟老臣八幡宗
之中以秀則曰備中も養能着止桂麿
長喜之備左馬物秀者揮部物澄朝比奈
駿河守忠郷太郎三郎長教福徳氏郎重
忠幸由比天保太郎正純庵原將監忠治小
二十一人流とゆふたら大牙の備中義元
時代は此人評定流とて軍中の出来

皆此軍の沙汰を執る一也、持勢
府を並ぶ者と相つり——楠棟司の惣
敗軍の時、之君義元の死生を知らず
歎く、よ、お前も、駿府も、近侍り、只
氏上も流石なけ、古古は云、甲斐時義
時うと思ひうとみおを、時、お小重
死を、与、面目と失、む、此者も
己、おを、口惜思ひ、内門、おはと
其、お整居、お、お、お、お、お、お、
政柄、目、お、お、お、お、お、お、
時、お、お、お、お、お、お、

徒小一して忠信と書一後者のみ畢
月ひ一在四好謔才の者方やうく一嫉
然く二心を抱者お集一とせり

武田信玄謀嫡子義信付織田武田

信勝と書

甲州の願と武田大膳等々時時入道信玄
其嫡子の太郎義信と今年秋吉原の
眾と臨入也自害せしり其子細と
いふと云ふ太郎義信其願女と人
求増く限於く窮也せしり其父信玄
幼くもん事を呼り信内もは並難く

思ひ暇道の版富兵部と云者の家又版
長坂保太郎只走人具一と云く版富
家又悲り夜明る道被婦人と云ひる
言に取らぬ別を信々も才部賜類見
義信と書い父の家と押願せんと
汁畧をめくもも最中 義信ハ切も
知る七月初下の家く灯笼見物せんと
此處一と例の版富の家又夜明る
陽と見え知り日付横目の役人若く
賄賂と書一内之れ々々は兄義信は
父若と書い早家田を押願せんとの

不孝乃出満を思ふに、夜く長坂と飯富、
家より行く、高浪せり、申す及、り
此の若実形、人よ於くは、家の一、事
なり、我等迷ふ父君、若君、人とは
思へ、未だ、夜、沈黙を、お、汝、若、乃
為、固、乃、為、能、心、を、何、く、寂、乃、人、義、佐
夜、く、長、坂、一、人、を、石、具、一、脈、高、乃、あり、
誰、を、せ、く、事、有、人、は、連、父、君、
中、上、一、若、又、此、の、虚、説、形、人、を、い、せ、ハ
美、く、仇、云、す、ハ、一、は、一、初、巧、中、心、是、ハ
目、付、横、目、未、娘、始、を、好、き、娘、一、さ、二

い、ま、も、勝、頼、心、の、計、ハ、中、計、ハ、人、と
思、ひ、其、夜、より、飯、富、家、乃、色、は、隠、走、居、て
伺、い、ん、ま、は、果、一、く、有、明、乃、月、澄、海、門、口
より、義、佐、は、名、跡、暗、く、ま、ま、あ、り、又、け、美、の
契、を、こ、り、長、坂、一、人、具、一、く、家、瑞、鏡、の
様、子、目、付、横、目、等、は、狂、は、其、際、一、聖、明
早、く、其、由、伝、言、ハ、許、け、色、は、入、道、大、乃、仰、天、
父、を、去、り、面、を、奪、ん、と、す、不、孝、の、城、子
早、速、に、謀、せ、ん、者、之、寸、ま、と、も、此、隠、深、被
一、人、に、限、ハ、一、は、一、連、又、義、佐、ハ、即、之、を
飯、富、長、坂、を、生、捕、り、乳、咽、を、さ、ま、し、と、

隠保の事には、海方と形も虚説して
版高の事と、次女と隠保を、義佐と、
懸りの事と、一と、商人、相成、一と、以て、
陳防を、一と、一と、賜頼保、佐佐木、道信、侍女
共、一と、城室を、一と、版高、一と、一と、隠保、一と、
貞女、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
叛逆を、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
佐去も、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
此入道、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、

罪形を、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
家督ハ、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
幼稚の、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
左近を、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
累代、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
刀、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
此事、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
後、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、
一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、一と、

らるゝ世織田武田一家の好を解とく
 けしは依吉をお古より奪へしと申すは
 す此妹女と云は備前も依吉の弟
 十八の女と云は濃州苗木の伯耆守の御
 姫一女子を人殺し後寡居し
 送らる其後又濃州掃部助を使と
 依吉の身女を清とて婦子依吉の妻と
 せん子を中送らるは是も依吉
 田意ししと云ふ事なり編年曰依吉の女を婦子
と云ふは濃州の事なり
天保八年

上月十日 依吉は濃州の事なりと云ふ事なり
 斯くして依吉は其女を清とて婦子依吉の妻と
 親を原し後を心出くしし事なり
 早く濃州を討てて京都に旗を揚ぐ
 との大志と云ふ事なり
 数年軍切老練の輩を選りし
 黒纓赤纓各十人を定めて軍馬の訓練
 御備せし事なり
 此陣の用意と
 ことなる事なり

義経朝臣将軍 宣下付 堀川守良

城攻英武園任佐隱謀事

永祿十一年戊辰正月十日

神君十系十友十任一の一部部は
三好松永十も十也也之之右右とと信信之之馬馬

藏藏兼兼朝朝臣臣とと以以りり、奏奏固固一一征征東東大大將將軍軍、

浦浦也也一一免免不不侍侍是是二二月月八八日日三三月月は

神君十大大將將兼兼佐佐基基流流（神君補）のの侍侍大大將將も

尾尾後後之之稻稻村村上上佐佐助助とと云云者者遠遠州州城城川川の

城城之之籠籠りり、（と）押押寄寄りり、經經之之免免をを改

治治不不松松平平勘勘部部 佐佐一一棟棟原原少少平平太

原原故故一一番番又又先先登登一一列列要要勇勇將將奮奮奮奮以

唐唐段段劍劍をを被被ささ城城之之切切りりかか防防戦戦の

術術をを以以りり、味味方方大大久久保保計計十十部部遠遠深深当当半

十十二二歳歳是是もも勇勇戦戦勵勵すす、（歌）ととすす、

首首級級をを増増ささりり、勘勘部部少少平平右右益益九九戦

已已一一士士卒卒とと給給揮揮、（遠）城城をを系系破破り

此此月月又又宇宇保保山山のの城城をを攻攻治治不不小小京京肥肥等

城城棄棄吉吉田田のの城城をを退退りり、後後此此城城をを信

一一、（遠）近近郷郷城城侵侵探探をを不不下下、守守り

大大軍軍をを急急にに押押寄寄せせ烈烈にに攻攻まませせ、

臨臨實實防防戦戦計計非非くく城城をを捨捨りり、所所引

をを、所所引引計計畧畧をを殘殘しし、城城中中はは煽煽動動を

押せよ、之を...は寄り大坂城の
系入付の婦婿...は寄り大
阪城...
四月の初、遠州豊田郡二役場の二役
場の侍之數の滝原之殿頭陀寺村松下
加之忠之鑑豊后太閤善治の三子、松平源左衛門連昌
今定徳川氏の家臣の藩士松平、回至之陣場之之陣之申立
守能、是等は皆今川、旗本たりといふ大
氏を、園意をうとみ、二浦を侍之陣部
を恨む。
徳川家へ降し、此後
山本常刀成行一平、常刀とす山本、常刀とす、今世、

見所は城を築く...は常刀
其れを巡見せし...は、
是れ...
徳川家...
六月...
七月...
...

の物好の弁は他更々とも見はれ難
三浦重の佐う駿州法大寺へつれり
こゝそ尤當代未同なり衣裏ハ綾羅
綿備の貞藤をこそ一盤は紙も
はるる一玉も氏志のそと花やう風流を
寤一衣裳類被るる其癖の方の中
泥一古敷をう佐實は其家破滅の兆
あらんと心あるものは歎息をうらむ
時一端一人は難人懐れ一西乃武士
我者らう一と奢侈を争ひ貞藤とき
護牙は奴の半も氏志は媚とせと見

右の佐う端ハ甲冑をうり馬具武具と
質物はお一躍の衣裳をとくれ
さきは直日は節敷大敷の價は甚貴く甲冑
の係は低く好う武切名卷の袴、玉繩と
見ると格樂之糸は又好うは節を吹た敷
をわ我は河原の辺者一端ハ端を言ひ
想々の節古は日夜を分たを弓馬の道ハ
少も心より好ひもの難是れ端を心と
こそはさもは格樂は者ハ節と揚り
戦富を修言は心切の武士は朝夕の相を
立ぬるる節をうり佐和の糸巻も酒宴に

山海の珠塔を設け糸や淫へやとく
日親阿くくく世は一婢一僕一事くく
旅と重代の刀賣したる頃の身りよ
成と擲儀也くくく風俗とはなると
分りくくく武田重隆守任虎へ去る天文
十年又我子任玄なるは甲州と出でて幸二
今川義元は舞臺子氏志は外孫をまへ
駿府小むり今川家乃長育我幸て年月を
送々く世任虎をり貪慾邪曲の性候
たまは出付氏志の昏弱口切の充將よ
心を抱き出中の武備怠弛せる形勢を

くくく毎々奸計を思ひ付法光はの謀合
氏志を重きくく海を西を奪え我子
任玄は後一父子和睦の計ひをくくく
濃名海河も関口兵部少輔刑部少輔頼朝の子
葉山殿の異名首山
備中も相伝系長兼之浦一歩の心を合
氏志と出かさんと計りくくく関口の方
より任虎の方へ送たる客言哉任虎何と
くくく取崩くくく今川の掃除掃毛
宗誓と云者拾骨くく廣末安房もくくんせ
けは八安房もたゞ驚れ早速は氏志へ
訴へ氏志と仰天くく速く任虎を捕へ

謙をんと洋儀に此より又内巻をらもの
 ちけもハ伝度原夜も縁解と運電一
 京都へ海上侍とく遠州鮎川の海形
 と云一白字の冊ちよ洋留の写内伝書
 方一使者成巻一強肩も一我一味の
 者ありと甚時名を書送り今川家滅亡
 迫まの松能く四好の流を流き味方と
 明一早く強をを切丸一と告一め
 其のハ京より一と一と一

 此巻は同ハ伝度原より
 此巻は同ハ伝度原より
 此巻は同ハ伝度原より

 今川家四好の巻目と
 奪ん謙を回一今川家四好の巻目と

善也贈賄を與へ若此支成就せらるゝ
 於くハ恩賞ハ臣の侍たり一と物一
 たり氏志は又因口刑死か捕をば生捕之
 後切らせ一と一其前ハ武田は
 由也のりは思ひもふしつと思中
 之事一とのみ必死乱乘を與へ奢後を
 極く切りも三浦を依のみと但せむたり
 一と不覚なき

織田信長と足利義昭會のり

足利義昭は胡合を頼り織原を年月と
 送後不知胡合家致限終く奪走せむ

体明くも急よ上洛の洋誠も形一甚
程く難統と生し始終ことわく一
とも思ふも以殊文少瀬十一年六月廿五日
義宗最忠乃男子阿若丸病死一きり
哀傷限形く更よ心も何事くもせり
凶故とも少治せ以尾州御田上徳介は
先年今川義元の大軍を烈風暴雨の
時良を争り一戦も切傷く義元を討撃
解の名譽の別將此人義昭未印州
甲賀力一運易せよき一討内く使者を
よふ世忠臣の志を歌たり此人我

歌終くも志一とく細川三好補番者
上野中務左衛門信俊を御使として其
作是す侍織田殿當時諸国英雄豪傑
数多をを重く信長は作符らり又
武門の規模何変り是よ志んいも信取
ゆとく甲斐く番道言可是は義昭其
返答を少治ハ大子候の志を後又上野中務
左衛門信俊を使として今更も速の御使
感心候く以深不見も軍勢を信長に陣
の絶頼思ふと形信長信長及へ絶遣
軍勢僅但く上洛一礼長九我

謀戮——將軍家恢復の功賞致す
先帝遺を奉るは出由一所定を移す
（きこやと返）言せし侍 此家と下織田と信長
本田和泉の半一信長
經義昭此頃ハ又鐵骨よりハ——
不破の内も光治和田伊賀も惟政を細川
上卿おとすも所定——鐵骨（きこ
是は永禄十一年七月の事）同月廿五日
義昭法別（東岩より）三政寺（入らる
織田殿ハ女七日）三政寺（劫奪）對面せし
太刀一腰馬一匹糧二傾沈香十包錦錦石
鐵眼千貫献せしも依る人——

銘くは物と賜らば此附義昭は
細川上卿あ人を以て織田殿（信長）
——は兼將軍義輝卿之好松永、鐵道の
礼多柳雲の潰礼極らぬ不肖乃義昭
源泊流落——天下再造乃志ありと
一人も裏のわぬ忠節せん志の者れ——
幸は信長英略を施——亡兄義輝卿の
怨讎を謀戮せば亡兄英泉の幽亮と
慰らのみ形は兼持院殿以来累代の
宗廟社稷と再造と云もの之にて
鐵切をたけし——御蓋を揚り

酒宴時我之侍一々織田殿暇乞一異
せし。初々瀬田殿は義昭の使者又
副使を遣はし、此は足利義昭の使者に依り、本
六圓に系事、義賢入道、取頼、其子、重、つ、依
義、彌、又、依、送、ら、是、は、今、自、治、長、は
足利義昭の所頼より、依奉し、上、治
せんと、取頼父子も、是より、人、質、を、お、送、を
用、く、正、幸、力、成、合、せ、し、送、信、誅、伐、の、切、を
願、む、一、二、の、忠、勤、を、ら、に、於、て、は、京、部、の
不、同、代、を、依、り、し、一、と、諭、告、せ、し、依、り、し、も
とも、取頼父子、勤、て、三、好、松、水、一、傳、の、事

能、是、は、返、す、も、せ、し、こ、は、敵、の、色、を、死、せ、し、
相、先、軍、神、の、血、祭、を、取、頼、父、子、首、切、く
京、部、を、攻、上、し、一、と、軍、減、は、是、八、月、時、り
九月、は、瀬、田、殿、軍、勢、皆、從、せ、し、是、京、部、濃
尾、張、の、勢、一、万、五、千、遠、州、三、州、の、勢、八、千、部、合
二、万、三、千、合、評、義、昭、より、中、乞、う、く、縁、り
せん、と、の、用、意、申、上、り、是、より、先、依、之、言
重、の、村、佐、盛、池、田、勝、之、部、佐、輝、丹、羽、部、右、衛
長、秀、林、佐、藤、右、秀、就、木、下、重、右、部、右、衛
直、智、右、兵、衛、重、利、河、内、右、秀、頼、河、内、右、新、十、郎、の
菟、谷、右、衛、福、富、平、左、衛、勝、村、三、千、部

粟稻茂物以下を集令自發昭の所を
豊り富都へお陣せんと思ふ之儀と
各乃其見を守りて之所在我包り
しりしとる多きは各左右を見と
一云を知る者とあらは其酌依之旨盛
一人列位の中より進み此所計畧
至徳の由事と存凡ハ一節を治た
或高の規模とす我々波也將軍
所敷より逆減法成順一終ハ柳
傾儀の切をそらんず此上の事
んや其上今我君は遠三尾懐

をへく云々至所より存天を
文く我古文は思ふたは子逆
誅滅一將軍我情一云改を施
心海を治め万民を括育せんと
英名盛徳比倫是る由一云
誅戮は其能乃中は包り海系
以彼友とせんと事終然一と
御西敵表斜形は汝去事と
重を無へらる酒宴夜と各
其後若谷之重と云々諸軍
五日茶の改集一若津

々々

松平勘定部佐一加勢之事

織田信長已々御陣せんと諸軍の軍勢
僅僅より及り是れ松平其頃三州島崎一は
津田源六部代使と一は織田は
信長今直是利發昭の所松平を誘へ
之好の道徑諸儀の爲高部一も津田を
所加勢ありて揚々もこの事
神若早速所也と云々追有入敷と進
一と一所退若あり源六部を帰し
扱松平勘定部佐一と今直加勢の大將

今世も相違し將士亦は法士の才
殊更駿勇の發を撰れり是れ部合八百
余騎を佐一と階分せし先にも人
一は源六部は當家の軍士亦万一
たる舉動ありは尤も懸崖也一は實に
形向合戦なりは源六其心は一は
軍切を願へしと神自らは信長ら
古年述今直の名せしが其
立備へしと一はと悦勇んで
計信一は初守長親若の所五男若井の

松平 吉良部利長の子より救済の名を
取切の中より水原之平二月に邑尾州
科津の場を在り潮田方の若く夜討
しし亭より竹村磯田戸崎滝山に云
名を平幸金人近討九寺を船乃勇士
取まはれ今自の大將を撰かさせし
時より一々の目目留人ししやみ思ひし者
れし
任二家申五年七月十六日八十五歳に卒す此は西條
沖より八五年の忠義よりなり水原之平科津の場は
サキ金部知智の大將よりなり
たはは平幸の討討なり

磯田上総介佐長は今自是利義昭哉

吉良 一江州より切より之好松平未の
逆徒を謀伐し是利家再興の功哉
成徳一中國一徳を立術軍一家を立
たしのみ口論を合せんは齊桓晋文の
霸業曠世の間より之し一と勇後(其旨
子直心)弱後(其旨)は英徳處港經勢
之是はしきもさし好り道中の法軍勢
我者らししと法州波牟城下(此其者
雲霧のや)佐長八江州一玉の地果を
以て軍城を撰し水原十一年九月七日
五々五の大軍を川原ししや也陣

せりし一とく先義昭の詔願に因り
余上一細川教孝を以て中上りとしハ
右の西の大軍子余若く仍て謀之上洛と
急ぐ一とく一とも進口の依り本前必欲
父子は内一之取松平の道徳中一志我
色一仔細西目少留、加勢城諸一今及
若く上洛の申進を遮んとて其勢因一
以り先取親父子を謀一彼亦前一割て
軍神と爲り其後申進を奉向一と
有る色ハ義昭も對面をくくよと娘一
けは尚家再無の事編り難く其

礼を厚く遊談一と作は是ハ信長も深
畏りしと退きせし退者あり事書陣
せんともく先經軍井著到を足らさる
依り官軍の尉佐盛業田修亮賜家丹前
右御室の長秀、忠之、信之、尉下原池田孫市
佐輝、佐々、内務助成政、前田又十、金利、家
城、名、部、秀、政、本、下、坂、吉、部、秀、吉、坂、井
右、近、政、尚、輝、左、兵、衛、右、藤、隆、編、家、伴、備、右
一、秋、伴、加、賀、兵、衛、右、福、高、平、一、藤、林、佐、俊、右、
秀、就、美、谷、九、幸、一、毛利、利、朝、物、一、毛利、利、内、右、
秀、頼、服、鹿、嶋、道、右、守、室、宗、田、邊、政、守、信、宗

助村字部 水部 帶刀部 忠廣 權利 平
村井 長門 皆 滝川 在 通 沿 道 一 益 長 谷 川
魯 忠 節 中 湯 豐 節 寺 和 田 新 物 依 沼 勸 平
不 破 河 內 寺 光 治 回 彦 節 丸 毛 三 彦 治
小 田 三 信 丸 毛 節 三 木 丹 波 源 六 木 茂
皆 是 侍 大 將 也 又 一 孩 子 什 藏 田 上 野 介
信 包 四 騷 回 彦 節 依 廣 七 騷 回 七 三 木
信 澄 七 騷 信 廣 七 騷 回 九 節 依 治 七 騷 回 安 節 寺
信 時 七 騷 回 彦 七 節 依 興 七 騷 回 彦 節 寺 存
八 騷 中 根 藏 中 寺 依 放 七 騷 回 源 節 長 益 七 騷
回 又 十 節 長 利 七 騷 回 興 二 節 依 節 寺 七 騷 其 子

喜 義 依 時 十 節 寺 依 信 兄 寺 回 源 節
依 光 其 子 市 一 節 依 成 節 節 依 昌 一
兄 牙 回 節 次 節 依 實 七 騷 回 源 十 節 依 次
其 亦 回 節 八 節 寺 依 鐵 回 三 騷 九 節 寺
回 彦 七 節 依 豐 回 拂 摩 寺 秀 盛 勸 中 節 寺
依 益 回 三 水 依 重 回 民 節 少 輔 依 重
回 庄 寺 依 治 蒙 各 安 房 寺 康 七 節 寺
寺 寺 秀 成 回 依 理 亮 依 就 回 軍 人 正
依 英 以 下 富 徒 一 萬 士 一 萬 金 錢 寺 寺
寺 寺 加 節 加 節 寺 勸 節 依 一 人 般 八 節 寺
其 他 尾 張 與 德 澤 勢 之 河 在 口 藏 四 節

随形乃將士彼是部公一乃金將一とそ
少くは侍足陣一已に江州平尾名を一系
後陣ハいさき濃州垂井赤坂を一さ
たり佐長の暴沮平相と盛盛一お徳の
揚羽の蝶一ッ條お一守侍赤旗を一お
義昭より揚りた龍相年二川西乃旗
斯波武清より徳一らき一此の級の旗
又織田敵の馬を一は黄絹一幅小氷米
通室の旗を一甚一う一書一一流の旗又
妙法蓮華經と題目書一馬下九本
此日は平尾村より若陣あり八日は

江州南宮山宮々滞留あり人馬の
息を休めらる花々一平尾を色々の
旗旗飄りたる形勢は春の花秋の紅葉
こころせたるよ吳ねん土日は愛知川は
若陣一其血を放火せし侍柳井は
へく一是きは法一木方周父子設けた侍
若とも救を不取りさき九瀬田敵は法皇
よは目と怨一其依と和田山との
西城を攻めし一多分と定め其後密元
とも石集其作城を攻一き多一い
つとと洋城せし侍坂井右近政尚進

中けるは善作と和田山との向きのみ
遠くは秋も宜くお計案又敵不多之
有(き)之幸浅井備前平兵衛方なりせん
和田山を押しせしむ(と)し(と)と(と)は
織田敵なり浅井は若臣の絶人者若
形もは浅井と善作と和田山の間に
陣せしめ和田山城を押しむ(と)し
依り内務物福富平兵衛あ人を浅井の
方へ使し(と)し(と)共(と)合(と)せ(と)ら(と)せ(と)し(と)
浅井は某父子も善作の向ひ發切を
願ひ(と)き(と)い(と)る(と)織田敵の仕方(と)し(と)く(と)

和田城の押(と)し(と)く(と)も(と)我(と)宜(と)く(と)形(と)の
軍(と)我(と)足(と)物(と)計(と)り(と)し(と)く(と)日(と)と(と)善(と)し(と)り(と)ん
とは(と)形(と)こ(と)し(と)中(と)陣(と)一(と)分(と)と(と)是(と)を(と)す(と)あ(と)は
仰(と)り(と)其(と)中(と)と(と)は(と)織(と)田(と)敵(と)重(と)て(と)あ(と)を(と)
使(と)し(と)せ(と)し(と)是(と)浅(と)井(と)父(と)子(と)物(と)は(と)は(と)多(と)き(と)
善(と)作(と)城(と)を(と)攻(と)む(と)し(と)一(と)と(と)任(と)色(と)は(と)さ(と)淺(と)井
取(と)り(と)織(と)田(と)敵(と)の(と)所(と)勢(と)攻(と)り(と)ん(と)時(と)は(と)
某(と)川(と)淺(と)井(と)攻(と)め(と)る(と)し(と)一(と)と(と)是(と)言(と)は(と)る(と)使
立(と)候(と)り(と)あ(と)り(と)江(と)州(と)第(と)一(と)の(と)糧(と)持(と)と(と)し(と)
孝(と)海(と)淺(と)井(と)父(と)子(と)は(と)是(と)言(と)の(と)託(と)を(と)以(と)り(と)
江(と)州(と)士(と)の(と)武(と)勇(と)の(と)能(と)は(と)思(と)ひ(と)知(と)る(と)事(と)は(と)

中江瀬田敵も圖多し江州の借り者古
さしをあらめと抄發給ひさし我々の
者先よ押を余屯へし濃州の
三人元と云侍氏高常陸介橋本輝雄も
侍伊賀守も和州の押を合をらる
又善治の城の形勢よく東邊より軍國
修理亮坂井右近將之助之入は庵後
四の士五百余騎居く是は侍其附
依く本取後も勇く用意せしとて
是懼敵十人途中近かしく防せんとう
くとも濃田表坂井亦川具せし軍八皆

騎馬乃遠若形を以て歩り之は是懼とも
抄群居たると濃之く四角八方に敵を
依く本は是懼尤何ははかたな侍一丈小
さく一丈城中さしと近りと進付しと
討取首とも三十余級持歸く濃田敵の
見らる入まけきは軍の正始同物也
たは是懼し給ひる濃田敵は保其他を攻
へしと軍波一攻しは是別への地也と
以て軍將等も城攻の事と示し
攻具の用意調くは名富重の尉丹羽
右部左下末谷右部淺井新八郎以下

諸將の軍勢六千金騎と云は九月十日
未東雲の頃より善地の場へ移りて以
らる三州の所加勢松平勘定部伝一と
其時多勢八百金騎と川平一勇を
善地の城攻めの勢より加り一回をたす

松平伝
勘定部

改定三河守風七地是等九段

愛 知 県



1103266487